書評

石原昌英・喜納育江・山城新編
『沖縄・ハワイ――コンタクト・ゾーンとしての島嶼』

彩流社，2010年，4,725円，444頁

栗山新也・三田　牧

本稿では2010年に彩流社から刊行された『沖縄・ハワイ　コンタクト・ゾーンとしての島嶼』の書評をふたりの評者が分担しておこなう。本書に収められた序章と５部19章のうち，栗山新也が序章と２部を，三田牧が１部，３部，４部，５部を担当する。評者たちは沖縄，ミクロネシア，ハワイといった島嶼地域をフィールドとしている点で本書のテーマにかかわりが深い。最初にレビューをおこなう栗山は，旧南洋群島やハワイの沖縄移民がおこなった伝統音楽や舞踊に焦点をあて，その社会史的研究をおこなっている。次にレビューをおこなう三田は，沖縄とパラオをフィールドとし，日本統治下パラオに住んだ人々の植民地経験について文化人類学的視点から研究している。それぞれの評者が自らの研究テーマやフィールドからえられた知見をもとに本書を読み，そこから考えたことをそれぞれの言葉で記すことにする。

「コンタクト・ゾーン」に響く歌（序章，２部）

本書は琉球大学が平成20年度よりアメリカ，アジアの研究機関と連携しておこなっている共同研究プロジェクト「人の移動と二一世紀のグローバル社会」の研究成果にもとづいた論文集である。このプロジェクトは，「グローバル社会の進展にともなって近年ますます顕著となっている世界規模での人の越境・拡散・還流を視野に入れ，人の移動にともなって生起する文化混淆や社会変容などの諸現象に関する普遍的なメカニズムとプロセスを解明」することを目的としており，これまでに琉球大学が独自でおこなってきた琉球史研究，沖縄移民史研究，戦後におけるアメリカと沖縄との文化接触の研究などを基礎としながら，そのさらなる発展をめざしたものとなっている。より具体的な作業としては，「人の移動によって生起した実例の分析を通じて，日本や沖縄の社会システムと他地域の社会システムとの比較や諸地域のアイデンティティ（固有性と普遍性）に関する実践的な知見を蓄積すること」，「沖縄の地政学的・歴史的経験を深化させ，沖縄が持つ固有性と普遍的な価値を内外に提示しつつ，普遍的な知見の発信をめざすこと」などがあげられており，他地域の実例に学びながら，沖縄を中心に展開した人々の移動にみられる諸現象の固有性と普遍性を追求しようという方向性が示されている。

KURIYAMA Shinya　大阪大学文学研究科博士後期課程
MITA Maki　日本学術振興会特別研究員 RPD，同志社大学

このプロジェクトによる研究成果の第一巻として刊行された本書には，2009年11月に「コンタクト・ゾーンとしての島嶼における文化現象――沖縄と東アジア・太平洋島嶼地域」をテーマにしておこなわれた国際シンポジウムでの発表をもとにした論文，20章（序章と５部19章）がおさめられている。本書の構成と各章のタイトル・著者を示すと次のようになる。

序　章　コンタクト・ゾーンとしての戦後沖縄　山里勝己

第１部　人の移動と言語
第１章　琉球クレオロイドの性格　かりまたしげひさ
第２章　移民とハワイ・クレオール――言語発達と持続性　アイリーン・H・タムラ／吉本靖訳
第３章　オラ・カ・レオ――ハワイ語復興における人びと，プログラムおよび進展　ナオミ・ロシュ／石原昌英訳
第４章　琉球諸語を巡る言語政策――精神の脱植民地化のために　石原昌英
人の移動と言語――まとめ　宮良信詳

第２部　人の移動とアイデンティティ
第５章　踊りと音楽にみる移民と先住民たちの文化交渉の動き――多文化社会ハワイにおけるオキナワン・アイデンティティ創出の揺らぎ　城田愛
第６章　二一世紀におけるハワイの人々のアイデンティティを支える共通の絆　デニス・M・オガワ／山口いずみ訳
第７章　二一世紀のグローバル社会における沖縄アイデンティティ――自己決定，真心，愛　ウェスリー・巌・ウエウンテン／崎原千尋訳
第８章　調査からみた沖縄の若者のアイデンティティ　林泉忠
人の移動とアイデンティティ――まとめ　金城宏幸

第３部　人の移動と環境
第９章　コンタクト・ゾーンとしての保護地域――イースト・マウイ（ハワイ）の事例から　ジョン・キュジック／山城新訳
第10章　明治期沖縄における人の移動と未開墾地の開拓――大東諸島及び石垣島名蔵の開拓をめぐって　仲地宗俊
第11章　USCAR 厚生局文書に記録された「比謝川汚染」と「石川ビーチ汚染」――戦後沖縄環境問題における〈汚染〉の構造　山城新
第12章　台湾人の八重山移住――その対立・融和・共生　石堂徳一
人の移動と環境――まとめ　榎戸敬介

第４部　人の移動とジェンダー

第13章　米国占領下の沖縄におけるジェンダー・ポリティクス　小碇美玲／喜納育江訳
第14章　戦後沖縄の公的コンタクト・ゾーンにおける女性の主体　喜納育江
第15章　タフな物語――ローカルの沖縄系アメリカ人軍人の男らしさを語る　タイ・P・カウィカ・テンガン／喜納育江訳
第16章　アメラジアンはチャンプルーの構成要素になっているか？　野入直美
人の移動とジェンダー――まとめ　本浜秀彦

第５部　留学――アメリカ班・中国台湾班合同パネル
第17章　留学における「人の移動」と「知の越境」――琉球の官生派遣を通して　前田舟子
第18章　占領下沖縄における米国留学――その政治的意図と主体的意味づけ　前原絹子
第19章　近世琉球の医師養成に関する試論――医道稽古と〈留学〉　勝連晶子
留学――まとめ〈留学研究というフィールド〉　波平勇夫
留学――まとめ〈双方向的な文化交流へ〉　高良倉吉

この小論では，このうち序章と２部をとりあげてレビューをおこなう。

序章の「コンタクト・ゾーンとしての戦後沖縄」のなかで編者のひとりである山里勝己は，戦後沖縄の状況をメアリ・ルイーズ・プラットが提唱した「コンタクト・ゾーン」と見なし，そこで生じた文化接触を相互交渉的なプロセスとしてとらえなおすことを提案する。戦後沖縄の文化接触をとらえるには，単に支配・被支配といった非対称な関係のなかで生じる一方的な関係性にのみ焦点化するのではなく，遭遇することで派生する影響関係のなかで形成されるあらたな主体性に注目し，そこでの文化の混淆や融合のダイナミズムと，そこに生じるコンフリクトを記述し，分析する作業が求められる。さらに，そのような戦後沖縄の「コンタクト・ゾーン」での文化生成のありようを，太平洋島嶼地域での実例と比較研究することにより，その普遍性や特異性を明らかにすることができる。本書は，こうした作業をとおして，そのような文化生成のメカニズムを解明し，そのメカニズムによって顕在化した諸相を読み解くために編纂されたものであると説明している。

従来の沖縄とアカデミアとの関係は，地理的範域を前提とし，総合的な視点からその特徴を明らかにする地域研究によって規定されてきた。これに対して本書は，地理的範域に囲まれた文化の実体を明らかにすることよりも，それをとらえるための視点に重きをおいている。文化接触の相互交渉的なプロセスに注目し，文化接触にかかわる研究においてかき消された支配される側の主体性，その能動的な文化形成のありようを重視しようというこの提案は，地域研究において想定されてきたような全体のなかの一部や周辺といった地域概念から脱却したうえで，あらたに文化どうしの出会いを描こうとしているという点で示唆的であり，本書であつかわれているような幅広い研究領域に応用可能な視点であるようにおもわれた。

しかし，この章をとおしておこなわれたような，戦後の沖縄文化や政治運動を「コンタクト・ゾーン」という概念に当てはめてとらえようとする作業が，かえって文化や運動と

いった領域にひらかれた可能性や，議論のしにくさ，厄介さを回避し，単純な構図での理解を推し進めてしまうようにも感じられた。たとえば大城立裕の小説『カクテル・パーティー』について山里は，「支配者であるアメリカ人という他者との関係性が契機となって，語り手が自らのアイデンティティを形成していくという，典型的な「コンタクト・ゾーン」の文学作品」と評価しているが，この小説にたいしてこのように「コンタクト・ゾーン」の概念を用い，アメリカ，沖縄との二項対立とあらたな主体性という図式でとらえてしまうことは，小説に内包された複雑さをやや単純化しているのではないだろうか。「コンタクト・ゾーン」としてとらえることでどのように生産的な議論ができるのか，あるいはどのようなことに盲目的になってしまうのか，ということにも十分注意を払いながら慎重に議論を進める必要があるようにおもわれた。

2部では，ハワイや沖縄の人々，ハワイのオキナワンなどに焦点をあてながら，人々のアイデンティティの揺らぎが議論された。このなかからウェスリー・巌・ウエウンテンによる7章「二一世紀のグローバル社会における沖縄アイデンティティ――自己決定，真心，愛」をとりあげてみたい。

ウェスリーは「二一世紀のグローバル社会の中で沖縄アイデンティティはどのように語られるか？」という問いを，「二一世紀のグローバル社会の中で沖縄アイデンティティをどのように語るのか」という，「私」への問いへと置きなおすことから出発する。そしてこの問いにこたえるために「私」が話し，語り，書きはじめようとする起点に，「真心」（マルコムXの「私には真心があり，その真心が私の信用証明書だ」という言葉からひかれている）という言葉を据える。「真心」をもって話し，語り，書くことは，権威や権力によって承認された「本物」のマイノリティとしてアイデンティティを主張することとはちがい，他人や他の世界観，他の生き方に対して，自身の心を開くということであり，さらにそれを他とどう共有するかという相互交渉的な行為でもある。ウェスリーは「真心」をもった「私」の語りに，アイデンティティを議論するためのあらたな態度を見出そうとしている。

「真心」のある行為としてウェスリーが注目しているのは，織物と歌である。本章ではこのうち歌を中心にあつかっており，「てぃんさぐぬ花」「仲風節」「恩納節」といった伝統的な歌から，時代や世代をこえた心のつながり，愛，真心について考え，さいごにハワイ三世の歌「フェンス」をとおして日系アメリカ人の収容所や米軍基地のフェンスについて考えながら，この歌が「真心，愛を胸に抱いていれば，何が我々を囲い込むことができるのか」と問いかけているのではないだろうか，と呼びかけるものになっている。この文章で最も興味深く感じられたのは，ハワイ生まれのオキナワン三世であるウェスリーが，伝統的な歌を過去に閉じ込められた文化財のようにとらえるのではなく，「過去と，現在，そして未来を繋ぐ重要な糸」としてとらえ，哲学的な解釈をおこなっていることである（それは「浜千鳥」をあらたな解釈でとらえた名渡山兼一にもみることができる）。このように，歌の伝承には，新しい文脈のなかで歌の意味が常に書きかえられ，複数的に広がっていくようなダイナミズムが本来的にそなわっているのである。だからこそ歌は，「フェンス」では囲うことができないような人々との社会関係をつくりあげるためのあらたな媒

介となることができるのかもしれない。（栗山新也）

コンタクト・ゾーンから見る島嶼社会の歴史と未来（1部，3部，4部，5部）

本書は，沖縄とハワイという二つの島嶼社会における様々な人の出会いと文化接触の在り様を，多角的かつ歴史的な視野からとらえる試みである。「コンタクト・ゾーン」という概念を採用することにより，支配者から影響を受ける被支配者という従来のとらえ方を脱し，両者が出会うことにより双方向的に影響がもたらされる相互的な力の働きとして読み替えようとしている。

この本が対象とするのは，琉球王朝時代から現在の沖縄，そしてプランテーション移民が流入する19世紀から現在のハワイであり，空間的にも時間的にもかなりの広がりを持っている。しかし序章を含む20本の論文中16本が沖縄や沖縄系の人々について論じており，主軸はあくまでも沖縄にあるように見える。私が担当する本書1部，3部，4部，5部に収められた論文全てをレビューすることはあまりに話題が広範におよび，散漫になる恐れがある。そこで，本小論では，とくに沖縄についての論文をレビューすることにする。本書で論じられる多様なコンタクト・ゾーンを，ここでは①琉球と明・清・薩摩，②沖縄と日本，③移民，④沖縄とアメリカに整理する。

琉球王朝時代のコンタクト・ゾーンとしてとりあげられているのは，琉球王国における明朝，清朝への官生派遣（17章）と，薩摩と福州への医道見習いの派遣（19章）である。ともに，歴史資料をもとに，琉球王朝から派遣された留学生を通して，琉球と明・清朝，そして琉球と薩摩の出会いの一端を描き出そうとしている。これまであまり知られてこなかった歴史の細部を明らかにしているという点で興味深い。その一方で，「コンタクト・ゾーン」という視点を導入することでどんな発見があるのかが不明瞭と感じた。

沖縄と日本のコンタクト・ゾーンについては，言語をめぐる論考がある（1章，4章）。このうち4章石原昌英論文では，明治期から戦後まで連綿と続いてきた方言撲滅と標準語の奨励が，沖縄の人々の精神を植民地化してきたと論じられる。そして，琉球諸語（沖縄方言）の見直しがなされてきている今日的状況が「精神の脱植民地化」と位置づけられ，「沖縄人」であることを確認する動きとして分析されている。

琉球諸語の抑圧と復権を，沖縄の人々の精神のあり方と結びつける石原氏の議論は明快である。しかし日本復帰によって「日本人」になり，標準語を自分のものにした沖縄の人々が，琉球諸語を取り戻すことで精神の脱植民地化に向かっているという議論の展開は，もう少し慎重に進めた方がよいのではないかと感じた。石原氏は，「〔精神の脱植民地化への〕努力は，日本人から日本語を話す「日本人」であると認められたので，言い換えると，沖縄人に対する蔑視と差別がなくなったので，可能となったものかも知れない。「日本人」になる努力をする必要がなくなったからである」と記している。しかし今日の「日本（大和）」と沖縄の関係は，「蔑視」や「差別」という形をとらないまでも，極めていびつである。

1990年代以降の大和における「沖縄ブーム」により，沖縄文化は著しく称揚されている。

沖縄の言葉もまた，沖縄好きの大和人の「お気に入りの言葉」として使われることがある。例えば「何くるないさ」という言葉を大和人が口にする時，私（大和人である）は，違和感をおぼえる。その言葉の含意や思想的背景がぬけおちて，「何とかなる，どうにかなる」という気楽な意味合いで使われがちなこともあるが，大和人がその言葉を使うのを聞くたびに，決して「何とかなってはこなかった」沖縄の様々な問題を連想するためでもある。沖縄が文化の独自性を称揚されつつ政治的に抑圧されている現状は，「植民地状況」と呼べるのではないか。琉球諸語の復権がそこから脱却する力を獲得してゆくか，注目してゆきたい。

次に，移民が作り出すコンタクト・ゾーンについては，大東諸島及び石垣島名蔵の開拓移民（10章），台湾から八重山への移民（12章），ハワイの沖縄系移民（15章）がとりあげられている。このうち12章石堂徳一論文は，「大日本帝国」というコンタクト・ゾーンにおいて，ともに「日本人」とされた台湾人移民と沖縄（八重山）人のコンフリクトを記述したものである。戦前期に台湾から八重山へ移民してきた人々の存在は広くは知られていない。この人々に光をあてることで石堂氏は，これまで差別される側として記述されがちだった沖縄社会にも，他者を差別し排除した歴史があったことを明らかにしている。そして，今日も八重山に生きる「台湾系八重山人」と「地元八重山人」が，両者の歴史を再検討し，次世代に継承していく必要があると指摘している。

人々の出会いの瞬間から年月が経つにつれ，様々な異質性や過去のコンフリクトは覆い隠される。その覆い隠された断絶をわざわざ明るみに出して議論することは，新たなコンフリクトの種をまくことでも，過去のコンフリクトを裁くことでもない。それは，他者と自己の過去に真摯に向き合うことで，今一度，他者と出会い直そうとする試みである。そこに新たに拓かれる「コンタクト・ゾーン」には，互いの信頼構築に向けた意思がある。このような試みは台湾と八重山に限ったことではなく，例えば八重山と沖縄，沖縄と大和，台湾と日本の間でもなされてよいことではないだろうか。

最後に，沖縄とアメリカのコンタクト・ゾーンについては，アメリカ占領下における，環境汚染（11章），ジェンダー・ポリティクス（13章），在琉アメリカ人女性と沖縄女性の主に婦人会活動を介したコンタクト（14章），アメラジアン（アメリカ人とアジア人の両親を持つ人々）と沖縄社会の共生をめぐる問題（16章），占領期のアメリカ留学（18章）が論じられている。このうちアメリカの沖縄占領政策の一環である留学制度を論じた18章前原絹子論文では，アメリカの政治的意図と，留学生による留学体験の意味づけが検討されている。アメリカ留学制度の政治的意図として前原氏は，「戦後沖縄の経済復興」，「民主化」，「親米的指導者の養成」，「沖縄占領の正当化」の四点を指摘している。その一方で，このような意図のもと送り出された留学生達は，主体的な経験を通してアメリカ社会や自己の内面についての認識を深めていったとし，アメリカ社会の不条理や（在米）日本人による沖縄蔑視への気づきなどをその例に挙げている。

「支配―被支配」のフレームにおいても，被支配者は主体的に見聞きし，感じ，時に支配者の意図を裏切っていく。そのような逸脱にこそ，支配を受けた人々の主体的な生の可能性がつまっている。今後の研究の展望として前原氏は，帰郷した留学生が沖縄の発展の

ためにどのように貢献してきたかについて調査したいと述べている。私としては，留学生が持ち帰った「借り物の知識」が，沖縄を発展させようとする実践の中でどのように「自分たちの知識」として鍛えられていったか，その点についても探求していただければ，と希望する。

本書は，実に多様な出会いの形を記述しており，島嶼社会の経験の特殊性について，研究の興味深い展開を予感させるものである。その一方で，話題の幅が広すぎて議論が拡散している観がある。また，ハワイについての論考が沖縄についての論考に比べて数が少なく，バランスに欠けているのも惜しまれる。1部「人の移動と言語」では，沖縄とハワイについてそれぞれ2章が割り当てられており，内容的にもハワイと沖縄の言語をめぐる政策や意識のあり方を比較できる。このようなハワイと沖縄を有機的に連関させ比較する視点を全体に貫くことができれば，より充実した内容になったのではないだろうか。また，バランスという意味では，沖縄と日本（大和）の関係を扱った章が少ないことも気になった。

島嶼社会が存続していくうえで，他の社会とのコンタクトのあり方は重要な問題である。私は沖縄とパラオを調査地としているが，沖縄よりもずっと規模の小さな島嶼社会パラオを見ていてとくにそれを感じる。パラオは，19世紀の末から，スペイン，ドイツ，日本，アメリカと，植民地列強の支配を次々に経験し，1994年にアメリカと自由連合協定を結ぶことで独立した。

この協定においてアメリカは，パラオの自律的国家運営に必要な資金援助をする一方で，50年にわたりパラオの土地を軍事利用する権利を持つ。幸い現在のところアメリカ軍によるパラオの土地利用はほとんどなされていないが，そのようなリスクを負いながら援助金を得ている現在のパラオの状況は，アメリカによる植民地支配を脱してはいないといえそうだ。一方で，パラオの人々はそのようにして得た資金を使ってより貧しい国の人々を「安い労働力」として利用しており，そこには人種差別など様々な問題が生まれてきている。この現代パラオのコンタクト・ゾーンにおいては，「支配―被支配」という二項対立や「被支配者の主体性」という視点では理解できない人間の関係がある。

沖縄やハワイは，パラオよりも大きな島嶼社会であり，経験もそれぞれに異なる。しかし島嶼社会の人々が，主体的に自分を失わずに生きるということは決して簡単なことではなく，その意味で，沖縄もハワイもパラオも同じ課題を抱えているように思う。どんな社会においても，コンタクト・ゾーンにおける経験はそれぞれの社会の姿を形作るものである。とりわけ島嶼では，それが社会の存亡と直結するまでに大きな影響力を持つ。それゆえに，コンタクト・ゾーンという視点から，島嶼社会の未来を模索することができるのかもしれない。

（三田　牧）